

## はじめに

『御朱印船航海図』『南蛮屏風世界図の研究』等の著作で古地図研究者として著名な中村拓教授の蒐集資料（以下、コレクション）が明治大学図書館に入ったのは、2007 年 10 月のことでした。

1932 年（昭和 7），その頃勤務していた京城帝国大学を訪れた白鳥庫吉博士から古地図の研究について尋ねられ、一連の草稿、未定稿を見せたという話が、『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図』の序文に書かれています。そこには 14 点の原稿があげられていますが、中村教授の著作や雑誌論文として公刊された研究成果以外に「行基図」「蝦夷・樺太」「利瑪竇・耶蘇会士の世界図、江戸時代の世界図」「江戸時代の日本地図」「台湾」「南洋統治領等の古地図」等があげられています。つまり氏は、これら非常に広闊な、いわば日本に関する地図の全体史を研究すべく、それを前提に資料を蒐集されたものと考えられ、コレクションがこのような広い研究分野を支えるに足る、幅広くかつ多様な資料群であることが想像されます。なお残念なことに、ここにあげられた未公開の原稿は、一部は本コレクションの中に残るものの、かなりの部分が敗戦直後の混乱と引き揚げの途中で失われたようです。

コレクションについて、簡単に紹介します。まず古地図・古星図類については、西洋古版地図が約 350 点、和漢古地図が約 400 点、南懷仁 (F. Verbiest) の「坤輿全図」、金正浩の「大東輿地図」、湯若望 (Adam Schall) の「赤道南北両緯星図」などが含まれます。図書については、和書約 200 点、洋書 130 点、地誌、探險史に関するものや書誌で構成され、高麗大蔵経版『大唐西域記』、標題紙の署名がモンテスキューのものであると言われるメンデス・ピントのスペイン語版『東洋遍歴記』、ラムジオの『航海旅行記集成』、ストラボンの『地理学』（インキュナブラ）などが含まれます。またこのコレクションの研究資料としての性格を示すものとして、地図・図書資料を撮影した 1,700 点の写真印画、64,000 コマのネガフィルムがあります。さらに 1,200 点にのぼる小冊子類（自筆研究ノート、論文抜き刷り、パンフレット等）や自筆所蔵資料目録、原稿等も中村教授の研究の軌跡をたどるためには貴重な資料です。

明治大学図書館では、洋書と和書の一部の目録作業が終了し、平行して資料のデジタル化を推進しているところです。また蘆田文庫研究会では、2003 年に『蘆田文庫目録古地図編』を刊行し、その後も図書館所蔵古地図類の調査・研究を進めてきましたが、その一環として中村教授旧蔵資料についても解題目録の作成を目標に、調査を開始したところです。このため図書館としても研究会としても調査未完の状態で、コレクションの全貌を把握するには至っておりません。また閲覧可能な資料も一部にとどまる状況ですが、中村拓教授の業績を顕彰し、旧蔵資料を包括的に保存することを目的として「中村拓文庫」を設立することとなりました。そして今回これを記念して、小規模ではありますが稀覯資料を選択し簡略な解説を付して、「中村拓文庫設立記念展」を中央図書館ギャラリーにて開催、展示します。

最後になりましたが、開催にあたりご協力をいただいたご子息中村士教授をはじめとする関係各位に心からお礼を申し上げます。

2011 年 10 月

明治大学図書館  
蘆田文庫研究会

## 中村拓の古地図をめぐる思い出

中村 士

この度、父の旧蔵地図資料が明治大学図書館の「中村拓文庫」として公開される運びになり、関係者の方々に対して感謝の念でいっぱいです。これを機会に、本業は医学者でありました父が、古地図の研究を始めた経緯や逸話などを簡単に紹介させていただきます。ただ、父に関する私の記憶の大部分は、既に半世紀余りも時を経ており、思わぬ誤解や矛盾が一部混じっている可能性があります。その点、何卒ご寛恕をお願い致します。

福島県梁川町の米屋の次男坊として生れました父は、尋常小学校を卒業したのみで、中学は検定試験で済ませ、一高、東京大学医学部を卒業、パリのパスツール研究所に留学したのは大正 10 年（1921）のことでした。学生時代から科学史もやりたいと考え、医学史、数学・天文などいくつかの分野を物色していたそうです。たまたま、セーヌ川河畔に出ていた露店の古本屋に、西洋の近世地図帖から切取った日本図がいくつか安い値段で展示されており、それらを購入しました。少し調べてみると、西洋人の描いた日本図の研究は日本ではまだほとんど着手されていないことに気づきました。また、西洋人による東アジアの地理上の発見とその成果である地図が、余りに西欧中心主義なのに腹を立て、この分野を研究する決心をしたとも聞きました。

パリに滞在中、フランス国立図書館所蔵の日本地図類の整理を手伝ったことも、研究に大いに役立ちました。その間、映画用の長尺フィルムが使えるカメラを特注で製作してもらい、それを持って欧州各地の文書館の地図関連資料を撮影して歩きました。それが約 64,000 コマのネガフィルムです。

戦後、NHK ラジオのとんち教室で活躍された人気者の一人に、石黒敬七さんがいます。1920 年代のパリ、柔道家であった敬七さんは「巴里週報」を発行しており、藤田嗣治画伯と共に当時のパリ日本人会の中心的存在でした。拓も絵画が好きで、医師という職業柄からも、パリに留学していた多くの絵描きさん達と親交を持ちました。特に、敬七さんとは、立場も性格も全く違うにもかかわらず、なぜかウマが合ったらしく仲が良かったようです（写真）。戦後、敬七さんは、種々の骨董・美術品の蒐集家として知られ、多くの随筆集も執筆されました。その中の一つで敬七さんは、自分の骨董癖は、パリ時代に拓の地図蒐集を手伝ったことから興味が湧いて始まった、と書いておられます。

昭和 4 年に京城帝国大学医学部に赴任した後は、朝鮮の古本屋が持ち込んでくる地図や地理書を一括して買い取ったりしました。赴任から敗戦引き揚げまでの約 15 年間、午前 3 時起床・午後 9 時就寝という生活パターンを守り、生化学及び古地図の研究という二足のわらじを履き通しました。昭和 20 年 8 月の敗戦で、大量の蔵書と、佐伯祐三らパリ時代の絵描きさん達から贈られた油絵などは全て失います。大学同僚の多くは敗戦後じきに帰国しましたが、拓は英仏語が出来たためか、釜山と京城（ソウル）を往復する駐留米軍の医師兼通訳として徴用され、妻と二人の幼児を連れて郷里の福島にたどり着いたのは翌年に入ってからでした。

徴用の期間、上司である若い米軍中尉と親しく話をするようになりました。拓が、古地図研究の話題の中でたまたま、ロシア出身の日本学者で後にハーバード大学に転じたエリセーエフさんのことをよく知っていると話をしました。するとこの軍人さんは驚いて、エリセーエフは自分が大学で日本語と日本歴史を習った先生だと答えたそうです。こうした偶然と、この米軍中尉の取計らいで、地図関係の資料だけは日本に持ち帰ることが許可されました — 一般の引揚者が手に持てるのみの財産しか携行を許されなかったことを考えれば、破格の取扱いだったようです。

昭和 24 年から横浜市立大学医学部で医化学教室を主宰しました（同門会の調べによれば、大学卒業から定年まで医学関係の論文総数は約 350 篇）。横浜奉職の直後、東京の未知の研究者から連絡を受けました。これより先、戦前に国際古地図学会誌イマゴ・ムンジに拓が投稿した論文が学会賞を受賞し、その関係書類と賞金の 50 ドル小切手が戦後日本に送られてきました。しかし、「拓」の字は通常はヒロシとは読めないため、東京

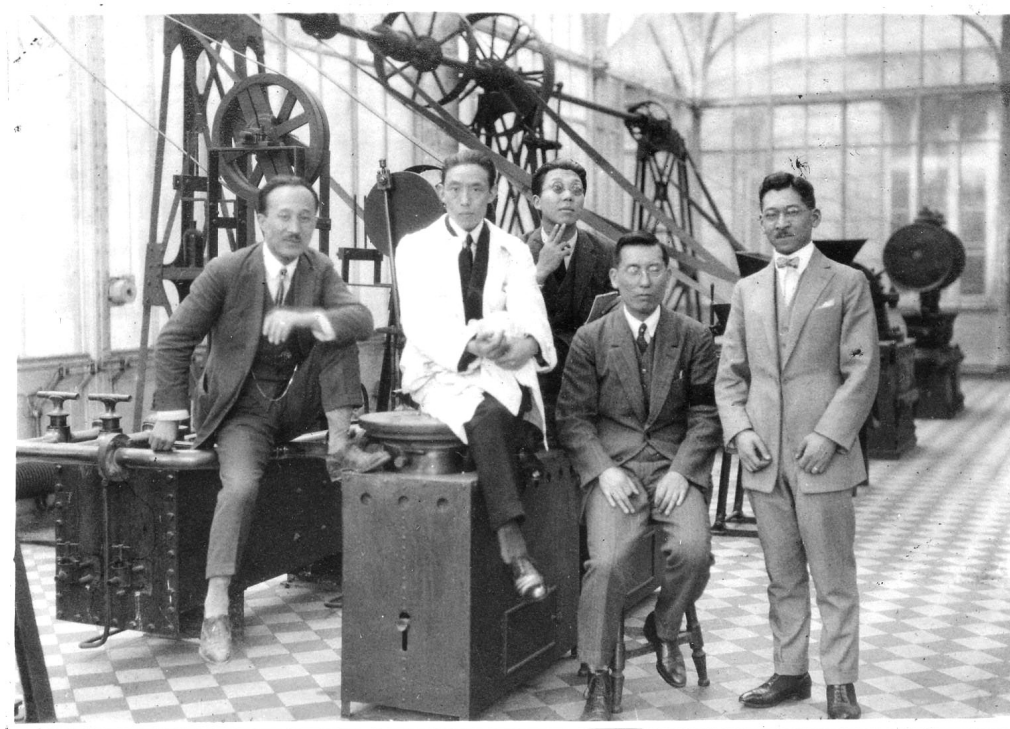
大学理学部の中村浩という先生のもとに誤って配送されました。この先生は、敗戦後の混乱の中を学士会名簿などで拓の郷里住所を苦勞して突き止め、わざわざ横浜市立大学まで拓を訪ねて下さったそうです。50 ドル小切手は当時の貧窮生活には大変助けになった、と父から聞かされた記憶があります。この小切手転送の話は後に、「同名異人の学者美談」として新聞にも取り上げられました。

昭和 27 年に、母の奔走で東京に漸く家建て、横浜市立大学勤務の合間に、引き揚げで持ち帰った地図資料の整理と研究を自宅で再開します。定年後、『御朱印船航海図』や『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図』などの著作が出版されました。それが出来たのも、ひとえに上に述べたアメリカ人中尉さんの好意のお陰です。

『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図』の序文の中で、「フランスからの帰朝後、蘆田伊人氏、秋岡武次郎氏との交遊は、古地図に対する愛着をいやが上にも募らせた」と書いていますように、父は戦前戦後を通じて、多くの国内・海外の古地図研究者と交際・文通をしたようです。実際私も、中学・高校時代に年賀状の宛名書きを毎年させられ辟易しましたが、そのため、拓の地図研究及びパリの絵描きさん達との交友関係はなんとなく頭に入っていました。1960 年代、松田毅一、広瀬秀雄、海野一隆、保柳睦美、ロンドン大学の C.R. ボクサー、などの方々が、何度か家に来訪されたことは私もよく覚えています。

今回、古地図研究の先輩で良きライバルでもありました蘆田さんの「蘆田文庫」と共に、同じ明治大学に自分の地図資料文庫が出来ようとは、父は夢にも思わなかったことでしょう。その意味で、「中村拓」文庫の発足を誰よりも喜び感謝しているのは、昭和 49 年に死去した父本人であるに違いありません。最後に、蘆田文庫研究会のメンバーの方々、及び写真を提供下さった石黒敬章さんに厚く御礼申し上げます。

(2011 年 8 月 なかむら・つこう)



写真：パスツール研究所（大正 14－5 年）での中村拓と石黒敬七（石黒敬章氏提供）  
中央白衣が中村拓、その右、あごに手を伸ばしているのが石黒敬七さん。「巴里週報」の記事では、早稲田大学の山本教授という名も見えるが、写真では同定出来ない。

## I 地図・星図・一枚物

### 1 「天下總圖」<sup>てんかそうず</sup> 浮雲墨客板写<sup>ふうんぼっかく</sup> 木版 1 枚 (50.2 × 32.7cm) 18 世紀後半

本図は、漢民族の世界観である中華思想をあらわしているが、李氏朝鮮時代に誕生した地図である。中央の大陸には現実の国として中国、朝鮮、西域諸国、蕃胡十二国が描かれている。次の内海には、多くの島が浮かび、その中に日本国や琉球国も描かれている。さらにその外側の大陸には『山海經』等による架空の国がある。図の両端の東と西には、大きな木が描かれた流波山と方丈が位置している。この図には天と地の間の距離「天地之間相距」が、「十四億二千里」と記録されている。これは想像上の距離である。いかなる理由か、11 世紀以前の内容の天下図が 18 世紀後半の朝鮮に流行した。

### 2 「坤輿全圖」<sup>こんよぜんず</sup> 南懷仁<sup>なんかいじん</sup> (F. Verbiest) 木版 8 幅 (各幅およそ 173 × 52cm) 1856 年京城版

イエズス会宣教師で欽天監（天文台長）を勤めたベルギー人フェルビースト（南懷仁は漢名）が中国で製作した東西両半球図。初版は康熙 13 年（1674）北京版。咸豊 6 年（1856）広東重版、咸豊 10 年（1860）朝鮮の京城版がある。京城版は地図部分は前二者と同板だが、周囲の図説部分は新たに仕立てた板木による。昭和 6 年（1931）に、京城帝国大学図書館で京城版の板木を用いて刷ったものがあるが、これは右端・左端の 2 枚を欠く 6 枚からなる。北京を通る子午線を本初（経度 0 度）とし、中国が図全体の中央に位置するように東半球を左側、西半球を右側に配す。展示図は 1860 年に刊行された京城版。図はブラウ系世界図の影響を受けた新しい図に従っているが、図説の部分はマテオ・リッチ<sup>りまとう</sup>（漢名：利瑪竇<sup>こんよばんこくぜんず</sup>）「坤輿万国全図」（1602 年刊）や艾儒略<sup>がいじゅりやく</sup>『職方外記』<sup>しよくほうがいき</sup>（1623 年）の記事によるという。

### 3 「禹跡圖」<sup>うせきず</sup> 拓本 1 枚 (76.5 × 77.4cm) 阜昌 7 年 (1136/37)

方眼紙のように直交する縦横等間隔の線を施した、中国伝統の「方格図」。「每方折地百里」とあり、一目盛が百里を表す。現在は西安碑林博物館に所蔵される石碑に刻された地図の拓本。阜昌は齊の私年号。1973 年の馬王堆漢墓発掘において地図が発見されるまでは、現存する中国最古の地図とされていた。「禹」は殷王朝以前、夏王朝の伝説的な創始者。中国全土を九州に分け、治水を行ったので、「禹跡」は禹の足跡、つまり中国全土を意味する。

### 4 「華夷圖」<sup>かいず</sup> 拓本 1 枚 (75.7 × 76.3cm) 阜昌 7 年 (1136/37)

前掲「禹跡圖」の石碑裏面に刻された、同じく阜昌七年の年記を持つ地図の拓本。方格図ではない。本図は、唐代貞元 17 年（801）に賈耽<sup>かたん</sup>が作成し、既に失われてしまった「海内華夷圖」の系統に属するといわれる。「華」は中国、「夷」は中国外の蛮族を指す。図右辺には「東夷海中之國」として三韓、扶桑、日本、倭国、琉求などが、左辺には「西域諸國」として旦末、車師、四鎮などの記述があり、中国とその周囲の異民族という当時の中国人の世界認識を表している。

### 5 「渾天全圖」<sup>こんてんぜんず</sup> 著者不明 木版 1 枚 (84.5 × 58.0cm) 18 世紀（李朝後期）

18 世紀中頃に、西洋天文学の影響下で製作されたと推定される。円図の形式は「天象列次分野之圖」（展示番号 11）に似ているが、恒星以外に星雲・星団を 10 個余り、記号で区別しているのが特徴である。また、星図の周囲には、日月食の原理図<sup>しちせい</sup>、七政古図（プトレマイオスの宇宙体系）、七政新図（ティコ・ブラーエの宇宙体系）、望遠鏡による太陽、月、惑星の観測図（木星には 4 個、土星は 5 個の衛星を付す）と解説が記され

ている。本史料の「渾天全圖」が重要なのは、従来は独立な物とみなされてきた「輿<sup>よ</sup>隆<sup>ち</sup>全圖」が、実は「渾天全圖」と、同じ形式とサイズの“組”として製作されたことをはっきり示している点である。

**6 「輿<sup>よ</sup>隆<sup>ち</sup>全圖」 著者不明 木版 1 枚 (73.2 × 58.1cm) 18 世紀 (李朝後期)**

「渾天全圖」(展示番号 5) とほぼ同じ紙幅、同じ紙質で、標題の字体等も同じことから、二枚一組で刊行されたと考えられる。日本国は図面右方に瓢箪形で描かれ、「北陸・山陰・畠山・東海・江戸・富士山・田原・美濃・倭・京・大阪城・明石・赤間関」などの地名が記される。図面下方にはオーストラリア大陸が「今称新島大里亜／西洋各國占據」として描かれており、いわゆるリッチ系世界図より新しい知見をもって作成されたもの。

**7 「地方<sup>じかた</sup>測量<sup>そくりょう</sup>之圖」 卍老人 (葛飾北斎) 筆 木版 (色刷) 1 枚 (38.0 × 53.0cm) 嘉永元年 (1848)**

葛飾北斎 89 歳の時に画いたものである。従来、この図は「検地」に関する図として位置づけられていたが、この図に付された説明によれば土地測量技術の図であることがわかる。したがって本図は、「検地」の測量図と言うよりは、土地一般の測量を後世に伝えようとしている図であったと理解する方が正しい。因みに図の右端には、城下町が画かれ、海辺では大砲の試射が行われ、道付きや台地の測量を行っている。また、甲・乙・丙・丁・戊・巳<sup>(ママ)</sup>と記号を付して、役人達がそれぞれに、大方儀、小方儀、水杭、水縄、間竿や、仮標などの測量道具を持ち、測量している場面を描いている。

**8 「楕円形世界図」(Die erst[e] General Tafel ...) セバスチャン・ミュンスター (Sebastian Münster) 銅版 1 枚 (35.5 × 41.0cm) バーゼル 1588 年刊**

ドイツの地理学者・神学者であるミュンスター(1488?-1552)が 1544 年に刊行した『天地誌』(Cosmographia) は、これまでにない百科事典的な地理書としてヨーロッパ各国語に訳され、ミュンスターの死後も広く流布した。展示資料は 1588 年版の『天地誌』に収録された世界図のうちの 1 図で、四隅が唐草模様であり、大洋にはさまざまな海獣が描き込まれている。

**9 「アジア図」(Asiae Nova Descriptio) アブラハム・オルテリウス (Abraham Ortelius) 銅版 (手彩色) 1 枚 (36.5 × 47.7cm) アントワープ 1572 年刊**

アントワープの地図収集・製作者として有名なオルテリウス(1527-1598)は、1570 年に地図帳『世界の舞台』(Theatrum orbis terrarum)を刊行した。当時最新の地図情報が盛り込まれた『世界の舞台』はベストセラーとなり版を重ねた。展示資料はこの『世界の舞台』に収録された 70 図のうちの 1 図で、中東から日本までのアジア全域を描いている。日本については Osaquo (大坂)、Meaco (京)、BVNGO (豊後)、TONSA (土佐)等の地名を確認することができる。

**10 「日本帝国図」(Imperivm Japonicvm ...) アドリアン・レランド (Adrien Reland) 銅版 (手彩色) 1 枚 (45.0 × 58.8cm) アムステルダム 1745 年ごろ**

標題下に 66 州に分けられた日本と記載。石川流宣の日本図を用いて描かれたとされる東洋学者レランド(1676-1718)の日本図で、西洋の地図上に初めて漢字が記入された図。1715 年ベルナル (J. F. Bernard) 編『北方旅行記集成』(展示番号 22 参照)に初出ののち、同年に出版業者ブリュデレット (W. Broedelet) が多くの装飾を加えた大型版で出版、修道院長のジャン・パウル・ビニョン (J. P. Bignon) に献呈された。のちにブリュデレットはヨアヒム・オッテンス (J. Ottens) に図の銅版を売却、本図はヨアヒムの会社を継いだ

息子のライナーとヨッシャ・オッテンス (R. & I. Ottens) による出版。右下は長崎の湾を描いた図である。現存図は複数あるが、手彩色のため各々異なる色彩が施されている。

## II 地図・星図 (パネル展示)

### 11 「天象列次分野之圖」 著者不明 写本 (彩色) 1 幅 (107.0 × 76.2cm) 成立年不明

古代中国の三家星座に基づき高句麗で作られた古星図を、1395 年に改訂製作したもので、李氏朝鮮を代表する星図。原図は石刻で、その後版本や多くの写本が作られた。朝鮮製の本図は、下の解説部分が切断されている。「天象列次分野之圖」は、幕末に至るまで江戸時代我が国の星図に大きな影響を与え続けた。その代表は、初代天文方渋川春海による「天象列次之圖」(寛文 10)、「天文分野之圖」(延宝 5)、春海の観測による新星座も加えた「天文成象」図 (元禄 12)、などである。

### 12 「赤道南北両総星圖」 湯若望 (アダム・シャル・フォン・ベル J. A. Schall von Bell) 撰 木版 8 幅 (第 1 幅、縦 165.2 × 横 52.4cm、全体幅 446cm) 崇禎 7 年 (1634)

西洋天文学の影響を受けた主要な中国星図。ヴァチカン図書館に 2 点、北京の故宮博物館、パリ国立図書館及び英国の個人が各 1 点を所蔵する。前 2 者は彩色されているが、パリの物は本史料と同様に未表装の墨刷。図叙 (序文) は徐光啓による。星の総数は 1812 星で、星等記号によって 6 等星までを区別しており、当時のヨーロッパ星図より 2 倍近く多い星数を含む。橋本敬造氏によれば、崇禎改暦の際に、徐光啓の指導で制作された星図「恒星屏障」8 幅が、すなわちこの星図であるという。

### 13 「天文圖」 王致遠 拓本 1 枚 (183.5 × 101.0cm) 淳祐 7 年 (1247)

通名「淳祐天文圖」。宋代に作られた最も重要な中国星図の 1 つ。原図は蘇州の石碑に彫られているため「蘇州石刻天文圖」とも言う。中国皇帝の侍講 (天子の先生) だった黄裳が 1190 年頃に製作した星図を基礎に、王致遠が石刻したと記される。天の北極を中心にした円図で、二十八宿星座の境界を示す経度線が放射状に示され、偏心した黄道の円と、天の川の輪郭も描かれている。藪内清によれば、黄裳の描いた原図は元豊年間 (1078- 1085) の観測を元に作られた。

### 14 「堅理圖」 王致遠 拓本 1 枚 (184.2 × 99.5cm) 淳祐 7 年 (1247)

「天文圖」(展示番号 13) と対をなすとみられる宋代の中国全図。ただし西北・西南の辺境は描かれない。「堅」は「地」に同じ。上記「天文圖」と同じく中国蘇州に建てられた石碑の拓本で、碑文から、原図は兼山黄公 (黄裳) が作成・献上したこと、その図を蜀 (四川) で入手したこと、淳祐 7 年 (1247) に王致遠が石刻したことが読みとれる。

## III 和漢書

### 15 『大唐西域記』 玄奘撰 木版 12 卷 3 帖 (26.1 × 12.9cm) 1244 年刊

唐の仏僧・玄奘 (602-664) によるインド・中央アジア見聞記。仏典原典・舍利を携えて帰国後、皇帝太宗の命を受け弟子・辯機 (辯機) の協力のもと編述し、646 年に上呈。展示資料は高麗版大蔵経再彫本。本文首に〈三蔵法師玄奘奉 詔譯〉大持捨寺沙門辯機撰〉。特徴は完本であること。さらに敬播の序を有し、巻末に〈甲辰歲高麗國分司大藏都監奉勅彫造〉の刊記を刻すること。大部分が上下単辺の刷り。毎葉 23 行、毎行 14 字、のど

丁付け。展示資料が折本仕立てに対し、京都大学所蔵本は線装本 4 冊と装幀が異なるが同版と見られる。

**16 『朝鮮物語』 木村理右衛門著 木版 5 巻 5 冊 (22.3 × 15.7cm) 寛延 3 年 (1750) 刊**

本書の巻頭自叙に、宝永元年 (1704) 嵐のため韃靼国に漂着し、中国・朝鮮 (朝鮮滞在は約 2 ケ月) 経由で帰国した越前三国の船頭が残した記録によりながら、朝鮮の地理・言語・土産などを記して、朝鮮の様子を分りやすく書いたという。従来『東國通鑑』(徐居正等撰、朝鮮本。寛文 7 年 (1667) に和刻本が刊行されている) という書物があるが、一般人には読解が困難なため、本書を刊行するという。内容は朝鮮国の始まりから文禄・慶長の役の歴史・三国の船頭による漂流記・「渡海之圖 [日本～朝鮮の図]・朝鮮八道之圖・朝鮮八道郡府州県の事・朝鮮官職考・朝鮮の國語・朝鮮國土産」から成る。

**17 『籌海圖編』 鄭若曾撰 木版 13 巻 8 冊 (29.1 × 18.3cm) 嘉靖 41 年 (1562) 序刊**

本書は海防を主として、倭寇鎮圧に関する資料を収録して成ったもの。嘉靖 36 年 (1557) 序刊・万暦 16 年 (1588)・天啓 6 年 (1626) の諸版が知られる。先行の版では鄭若曾撰となっているが、天啓版 (本書) では胡宗憲の編輯と記される。胡宗憲は鄭若曾の上司で、倭寇の首領王直を平定したことで著名であったため、胡宗憲の編輯とされたと推定される。中国沿海地方の地図を掲げながら、日本との通交の沿革・日本事情・中国沿海の海防状況・倭寇の動静などを総括的に叙述し、倭寇対策におよぶ。卷之二が日本記事にあてられており、日本に関する記事は本書成立の前年に成った鄭若曾『日本圖編』(1561 年) によっている。展示箇所は卷之二の巻頭の「日本國圖」。

## IV 洋書

**18 『航海旅行記集成』 (Navigationi et viaggi ...) ラムジオ (G. B. Ramusio) 編 3 冊 (32.0 × 22.5cm) ヴェネチア 1588, 1583, 1556 年刊**

ヴェネツィア、パドヴァで教育を受け官吏となったラムジオ (1485-1557) は、ポルトガル・スペインのあいつぐ新航路・新大陸発見に魅了され、1523 年以前よりそれらに関する系統的資料蒐集を開始した。本文はイタリア語。生前刊行をみたのは第 1 巻 (1550 年)・第 3 巻 (1556 年) のみで、第 2 巻は死後 1559 年刊行。第 4 巻も企画されたが実現しなかった。版種は多数にのぼり、本資料もいわゆるとり合わせのセットである。この『集成』はのちのヨーロッパ旅行・探検記集成に多大な影響を与えた。第 2 巻にはマルコ・ポーロの『東方見聞録』も収められている。

**19 『東洋遍歴記』 (Historia oriental de las Peregrinaciones ...) メンデス・ピント (F. Mendez Pinto) 著 1 冊 (28.6 × 20cm) マドリッド 1620 年刊**

ポルトガルの冒険家ピント (1510?-1583) が 21 年間アジア各地を放浪した末、帰国後晩年に子孫の為に書き残した回想記。ポルトガル文学の傑作のひとつ。1614 年 Pergrinação (遍歴記) の名で刊行。展示本はそのスペイン語訳。表題紙にフランスの哲学者モンテスキューの署名がみえる。ピントは日本に 5 回来たり、種子島に鉄砲を伝えたポルトガル人 3 人のうちの 1 人と自称する。本文 266 ページには種子島 (Tanixumaa) の文字がみえる。

**20 『地理学』(Strabo De situ orbis) ストラボン(Strabo) 1冊 (31.4 × 21.2cm) ヴェネツィア 1494年 Johannes Rubeus Vercellensis 出版**

ギリシアの歴史家・地理学者であるストラボン(64B.C. ころ～20A.D. ころ)の著作で、一般に“Geographia”の名で知られる。本書はラテン語訳。全17巻構成で、第1・2巻が序説、第3～10巻がヨーロッパ地誌、第11～16巻がアジア、第17巻がエジプト・アフリカの地誌である(第7巻は不完全)。初めて地球の大きさを測定したエラトステネス(Eratosthenes)をはじめ、現存しないギリシアやローマの著書からの引用が多数見られ、プトレマイオス(C. Ptolemaeus)以前の地理学を知る上では重要な資料である。本書は15世紀に活版印刷された書物インキュナブラ(incunabula、揺籃期本)に該当。異版の『地理学』は各巻首に職人(ルブリケーター)による装飾文字が描かれているが、本書は職人への指示文字の記載あるいは空欄があるにすぎない。

**21 『地理学』(Geographia ...) クラウディオス・プトレマイオス(Klaudios Ptolemaios) 1冊 (23.0 × 17.0cm) ヴェネツィア 1564年刊**

2世紀アレクサンドリアの偉大な天文・数学・地理学者の2大著作のひとつ『地理学案内』(Geōgraphikē hyphērgēsis)は、後世に多大な影響を与え、とくに15世紀後半以降多数の版が刊行された。展示資料はギリシア語からのラテン語訳刊本の一。いわゆる「プトレマイオスの地図」は初めて緯度・経度を導入し、ヨーロッパは10、アフリカは4、アジアは12の図を有する。本書ではヨーロッパ10図におのおのさらに新図を添え、また新大陸図などの増補がみられる。ただし前者中、3図を逸する。

**22 『北方旅行記集成』(Recueil de voyages au nord) J. F. ベルナール (Jean Frédéric Bernard) 10冊 (16.7 × 10.0cm) アムステルダム 1716～1738年刊**

J. F. ベルナールは、アムステルダムの出版者。本書は、アイスランド、グリーンランド、ハドソン湾、スピッツベルゲン、カリフォルニア、シベリア、朝鮮、満州等ヨーロッパ北方地域の探検記、旅行記を集めフランス語で集成したもの。特に第4巻は日本周辺に関するもので、1643年のフリース(M. G. de Vries)によるカストリクム号の蝦夷沿海探検報告、カロン(François Caron)の日本帝国に関する報告、フェルビースト(Ferdinand Verbiest)の満州旅行記などが含まれる。展示資料は、3巻、4巻が新版、5巻、6巻が第3版など異なる版からなるとりあわせ本であるが、10巻全てに同じ帝政ロシア期の図書館の蔵書票が貼付されている。

## V 研究資料

### 23 自筆ノート類

旧蔵資料の中に「パンフレット類」と分類された段ボールが12箱存在する。内容はその名の通り各種パンフレット類のほか、展示会目録、雑誌論文抜き刷り、古書販売目録など様々なものがあり、1311番まで通し番号が付けられている。この中に、多数の自筆ノートが含まれており、調査情報、図のトレースのほか、小片のメモや手紙、領収証の類も挿入し、関連事項ごとに製本している。まだその全容は把握されていないが、ここにその数点を展示する。

### 24 ネガフィルム

研究資料の中には、約64,000コマ、537点の資料を撮影した35ミリネガフィルムがある。イエズス会宣教師の日本報告をはじめとしてマニユスクリプトを含む日本関連欧文図書資料が大部分を占めるようであるが、

詳細についてはまだ把握されていない。次節の写真プリントも含め、これらは国内外の図書館、博物館、文書館等、あるいは個人が所蔵する資料を撮影したものであり、戦災により失われたり散逸したものも少なくないとのことである。『御朱印船航海図』等公刊された書籍において、所蔵フィルム資料は [CP-番号] で記載されている。

当初フィルムは、金属の缶に保管されていたが、劣化して判読不能になった部分もあったため、図書館へ搬入後専門業者に依頼し、可能な限り修復を施し、現在はマイクロフィルム型のリールで保管している。

## 25 写真印画

古地図等を撮影した写真印画約 1,700 点は、台紙に貼付され「Olterius 関連」「行基系日本図」「古代宇宙観」などのように分類され 12 個の A2 紙大の帙に収納されている。また台紙に未貼付の写真印画も多数ある。公刊された著作において、これら写真印画資料は、P-資料通し番号-（収納帙番号-分類番号）で記載されている。例えばここに掲げる資料の番号 [P-1251-（6-3）] は、通し写真印画番号 1251 番、第 6 帙収蔵・分類番号 3（航海図）という記号内容となる。しかし実際の写真印画資料群の構成が明らかではないため、この資料番号形式は理解しにくく不評だったようである。なお、第 6 帙の場合、分類番号は 1：屏風日本図、2：屏風世界図、3：航海図となっている。

## 主な参考文献

- C. クーマン, 長谷川孝治訳. 近代地図帳の誕生：アブラハム・オルテリウスと『世界の舞台』の歴史. 臨川書店, 1997
- Jones, H.L. The Geography of Strabo. vol. I-VIII. The Loeb Classical Library. Heinemann, 1932
- Nordenskiöld, A.E. Periplus : an essay on the early history of charts and sailing-directions. P.A. Norstedt, 1897
- OAG・ドイツ東洋文化研究協会編. 西洋人の描いた日本地図：ジパングからシーボルトまで. 1993
- L. バガーニ, 竹内啓一解説翻訳. プトレマイオス世界図：大航海時代への序章. 岩波書店, 1978
- メンデス・ピント, 岡村多希子訳. 東洋遍歴記 1-3. 東洋文庫. 平凡社, 1979-1980
- マルコ・ポーロ, 愛宕松男訳注. 東方見聞録 1-2. 東洋文庫. 平凡社, 1970-1971
- Walter, L. Japan : a cartographic vision : European printed maps from the early 16th to the 19th century. Prestel, 1994
- 飯塚浩二ほか編. 大航海時代：概説・年表・索引. 大航海時代叢書別巻. 岩波書店, 1970
- 海野一隆. ちずのしわ. 雄松堂出版, 1980
- 海野一隆. ちずのこしかた. 小学館スクウェア, 2001
- 海野一隆. 地図の文化史：世界と日本. 八坂書房, 1996
- 海野一隆. 地図文化史上の広輿図. 東洋文庫, 2010
- 海野一隆. 東洋地理学史研究 大陸篇, 日本篇. 清文堂出版, 2004-2005
- 大崎正次. 中国の星座の歴史. 雄山閣出版, 1987
- 織田武雄. 地図の歴史. 講談社, 1973
- 玄奘. 大唐西域記. 京都帝國大学文科大学叢書 第 1. 大日本図書, 1911
- 玄奘, 水谷真成訳注. 大唐西域記 1-3. 東洋文庫. 平凡社, 1999
- 全相運. 韓国科学技術史. 高麗書林, 1978

- 全相運, 許東燦訳. 韓国科学史：技術的伝統の再照明. 日本評論社, 2005
- 田中健夫. 中世海外交渉史の研究. 東京大学出版会, 1959
- 中村拓. 朝鮮に伝わる古きシナ世界地図. 朝鮮学報. 39・40, 1966
- 中村拓. 鎖国前に南蛮人の作れる日本地図 1-3. 東洋文庫, 1966-1967
- 橋本敬造. 「赤道南北両総星図」と「恒星屏障」. 新発見中国科学史資料の研究 論考編. 京都大学人文科学研究所, 1985
- 宮紀子. モンゴル帝国が生んだ世界図. 日本経済新聞出版社, 2007
- 三好唯義編. 世界古地図コレクション. 河出書房新社, 1999
- 藪内清. 中国の天文暦法. 平凡社, 1965
- 横浜ユーラシア文化館編. 天空 地球 ユーラシア：古地図が描く世界の姿. 2006
- 渡辺敏夫. 近世日本天文学史 上下. 恒星社厚生閣, 1986-1987
- Catalogue of Books printed in the XVth Century now in the British Museum. The Trustees of the British Museum, 1962-2007
- Encyclopædia Britannica. 24 vols. 1965
- Phillips, P.L. A List of Geographical Atlases in the Library of Congress. vol. 1-4. 1909-1920
- Tooley, R.V. Tooley's Dictionary of Mapmakers. A.R. Liss, 1979
- 鮎澤信太郎文庫目録. 横浜市立大学図書館, 1990
- 神戸市立博物館館蔵品目録. 神戸市立博物館, 1984-1996
- 世界名著大事典. 平凡社, 1960-1961
- 地理学辞典. 二宮書店, 1989
- 日本古典籍書誌学辞典. 岩波書店, 1999
- インキュナブラ小事典. <http://www.ndl.go.jp/incunabula/glossary/index.html> (accessed 2011.9.21)
- 海印寺八萬大藏經. <http://www.i80000.com> (accessed 2011.9.21)
- 高麗大藏經知識庫. <http://kb.sutra.re.kr/ritk/index.do> (accessed 2011.9.21)

#### 協力者一覧

- 鈴木 純子 (日本国際地図学会常任委員)
- 石黒 敬章 (石黒コレクション保存会会長・古写真研究家)
- 服部 文昭 (京都大学大学院人間・環境学研究科)
- 具 賢訓 (高麗大 漢籍司書)
- 吉田 千草 (明治大学中央図書館事務室)

#### 展示スタッフ

明治大学中央図書館ギャラリー企画運営 WG

- 鈴木 秀子 (図書館総務事務室)
- 仲山 加奈子 (図書館総務事務室)
- 宮澤 順子 (中央図書館事務室)
- 吉田 千草 (中央図書館事務室)
- 永田 由香利 (中央図書館事務室)
- 西村 礼子 (中央図書館事務室)

## 中村拓（なかむら・ひろし）

### 略歴

|                |                                                                              |
|----------------|------------------------------------------------------------------------------|
| 明治 23 年 (1890) | 3 月 25 日, 福島県伊達郡梁川町（現在伊達市）に生まれる                                              |
| 大正 5 年 (1916)  | 第一高等学校卒業                                                                     |
| 9 年 (1920)     | 東京帝国大学医学部卒業                                                                  |
| 10 年 (1921)    | パリ, パスツール研究所研究員 (1929 年まで)                                                   |
| 13 年 (1924)    | 理学博士号をソルボンヌ大学より取得                                                            |
| 14 年 (1925)    | 医学博士号を東京帝国大学より取得                                                             |
| 昭和 4 年 (1929)  | 京城帝国大学医学部講師に就任                                                               |
| 6 年 (1931)     | 京城帝国大学医学部教授に就任                                                               |
| 22 年 (1947)    | 論文 “Old Chinese world maps preserved by Koreans” により, Imago Mundi 賞を受賞       |
| 24 年 (1949)    | 横浜市立大学医学部教授に就任 (1961 年まで)                                                    |
| 27 年 (1952)    | 第 1 回横浜文化賞受賞                                                                 |
| 36 年 (1961)    | 文学博士号を東京大学より取得                                                               |
| 39 年 (1964)    | 論文 “The Japanese portolanos of Portuguese origin” により, 2 度目の Imago Mundi 賞受賞 |
| 49 年 (1974)    | 2 月 7 日, 死去。82 歳                                                             |

### 主要論文・著作

- Les Cartes du Japon qui servaient de modèle aux cartographes européens au début des relations de l'Occident avec le Japon. Monumenta Nipponica, vol.2, no.1, 1939, p.100-123.
- 東亜地図の歴史的変遷. 続大陸文化研究, 岩波書店, 1943, p.147-182.
- Old Chinese world maps preserved by the Koreans. Imago Mundi, vol.4, 1947, p.3-22.
- 本邦に伝わるブラウー世界図について. 地理学史研究 第一集, 柳原書店, 1957, p.23-65.
- 戦国時代の日本図. 横浜市立大学紀要, vol.58, 1957, p.1-98.
- 東亜の古地図. 横浜市立大学紀要, vol.88, 1958, p.1-194.
- 南蛮屏風世界図の研究. キリシタン研究, vol.9, 1964, p.1-273.
- The Japanese portolanos of Portuguese origin of the XVIth and XVIIth century. Imago Mundi, vol.18, 1964, p.24-44.
- 御朱印船航海図. 日本学術振興会, 1965.
- 鎖国前に南蛮人の作れる日本地図. 全 3 巻. 東洋文庫, 1966-1967.
- 赤水図の欧州における評価. 地理, vol.13, No.1, 1968, p.85-91.
- 朝鮮に伝わる古きシナ世界地図. 朝鮮学報, vol.39, 1966, p.1-73.
- 欧米人に知られたる江戸時代の実測日本図. 地学雑誌, vol.78, no.1, 1969, p.10-18.
- ダンヴィルの手翰並にカステル神父の答書〔含資料（原文ほか）翻刻〕. 横浜市立大学論叢 人文科学系, vol.23, no.2, p.135-238.

\*なお, Imago Mundi 27 巻 (1975 年) に掲載された中村拓氏追悼記事が以下の URL で参照可能です。

[http://www.lib.meiji.ac.jp/nakamura/docs/obituary\\_e.html](http://www.lib.meiji.ac.jp/nakamura/docs/obituary_e.html)

## 蘆田文庫研究会

平野 満\* (明治大学文学部教授)  
岩井 憲幸\* (明治大学文学部教授)  
吉田 優\* (明治大学文学部准教授)  
中村 士\* (帝京平成大学現代ライフ学部教授)  
菊池 亮一\* (明治大学図書館総務事務室)  
永田 由香利 (明治大学中央図書館事務室)  
畑野 繭子\* (明治大学和泉図書館事務室)  
平田 さくら (明治大学生田図書館事務室)  
飯塚 貴子\* (明治大学農学部事務室)  
関 良子\* (國學院大学大学院特別研究生)

\*は解説執筆担当者

会期：2011 年 10 月 15 日～11 月 20 日

会場：明治大学中央図書館ギャラリー

### 中村拓文庫設立記念展

編 集 蘆田文庫研究会  
発行人 金子邦彦  
発行所 明治大学図書館  
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1  
<http://www.lib.meiji.ac.jp/nakamura/>  
発行日 2011 年 10 月 15 日